北京圖書館藏

螢

以詞并歌為卷若
詞ばかりなるもあらもあるべし
多くはかなきことをそこに寄
せはべれどのこころを螢に
つけてまことをあらはすべき
歌文ものしたるは世に出でぬ
源氏此六年の十月のころ

今もかくあるべきこと公つき
玉ほうそうの
いかなるべく　源氏物語
しるべきもの
とはるべきもの
よ毎年譲り給へる天下の
八幡宮の
おほせ　天皇の
無礼なる源氏のろく
しる所なるもひなるもなる

公卿
きれるよりまもて　源氏の上
をもはかるも皆公卿
なるべく
物のふ
也なるべ
ぬ
なる
さの姫宮
おもるべ
紀氏
むろ也
ふ
源
ま

公武の分
一統とも
しるべき
つはものも
所つとめ
かの人の宮
大夫監
とおすもの
なるべし
書とゝのうと
海く

監八夫中
すべてはこ
ひの地源氏
て人のおもむ
しさとゝ
何とぞ
うなるおの
またとゝ
ものゝ文
別して

言ひ出きこえ侍ぬる
きこえ侍ぬる毎也
ぬる事也　とよ清濁
有物也濁ノ読なん
けるなり　むろ[illegible]
てもなさけなくあしくも
終へきなるあるさまを好
色ぬなを行ともらねや
よりてなる所也
いてきめてなり　寄てく

志ある人も物を敬ありて
けるくいみえさる也
れらは　積月也
月日ありてつくなく
なるあるとはやうくなり
けるなりよりもち所也
きこえなるなりある
中
國明訳を集　九条大学
乃四巻よりきこえ侍る
月日ありとも寄よむ月日あるを

五月雨にさへなりにけるかな
徒然集
神代より忌むといふなる五月雨の
こなたに人をとふよしもがな
うつほはなりのつとひさはりて
いかにすへき五月雨のそらな
をはらへるかたのおもひ そら
けとりかねてそやさしき
てもえしくなりぬとそ
ほとゝきす鳴ねさむしく成めるは

侍るをのこいくよかなれて
東宮にわあそ御に
あはれも人の引つゝ恋しきを
此五月雨をいはましもあるらん
今案五月に忌む月なれ
よろつをはゝかる故五月雨
にあらはれてといふ也
五月に嫁娶を忌む月なれ
ば五月まつの侍るころの
よ過て此ところ也

やむとなく

むかしは出身にたるべき

ものとなりにたれども

宰相さうは　多田の父信

中納言の中将宗盛は宰相中将の

むすめ宰相の局と云

女房とをいはせども

絶えて

乃れかうせもとより出

是頼とも源氏の御方

うち物語

をはなとのたまふ

堂無量寺おのこまを

を抜りしとも

うちてあるもはなきさき

むかしの四位源氏の公卿

給へるとのたまへ

無量寺をもたまへ

くるをもとも

伊のと思ふよい　無量寺へ

玉ゆらは
あれ源氏の君あそび
きこえていとはかなく
見たまふの心ちを
ものあはれにおもほえ
とりあいたまくーさん
ゐるられたりけり
なほ公はさう　源氏は公け
きこえて宮はものふさ
ぎたまはるを

ぜひ宮ハ知りそむる
ほどをもうつ
ぜかれてく思ひそめき
このひとをもとめ
出たまふ　吾妻の出発
おやうちあり　源氏の出
ありて吾妻をとりもち
如元のつゆくしかた
むかしのぜうしと人と
思ひおもひ

むかしとて　源氏の事は
乃高のあたりいと先ちる
ものなれど
源氏のうへ
ふるまひ
うちいで　兵部卿の宮
相見るよのなかを
ひるまるる　好色乃うへの
ものもあるに寄こしく
もはなれよくの物語

さいれのまさしくはなきこと
高ぶせるそこ　ひさいれの
宮うもおろかなりてかつて
まいるなれど
おそりいうちるよつけて
さいれの宮よつけて源氏
乃ものもありなど
いるあるわ　是ハ源氏の
教訓也あるつくり物とは
まるまるさとを思ふ

[illegible]
にしてのはた
[illegible]のと　それくの
[illegible]
らしおつまはいとあと
いけまちおつてうす
[illegible]
れこそ打こと
おこそのあひとはと
[illegible]て　むろ慈

[illegible]
出[illegible]
に源氏のまこと
[illegible]
[illegible]
[illegible]
むろ慈円道
事はきこしめしを
源氏のおくの
[illegible]

きちやうけなる也
よりかけて　源氏よりはしまれる也
おもらかす紐なる
几帳乃帷ハ三重なる也
表ハ綾裏ハ練文紗也中階
ありうみすゆるとハ裏の
うら也
中
かうし上内侍のうへいつれも代々
いのちのきれんせんとおほ
するれとなるもあつきもよ

とよせハそのしつまを　あ
しとあやりはしまでも
に掌握しまれおくく
もすうにこのつぬてとひ
ありくうへこれのかへよお
いみえぬへのうりとおもひ
てうそしまてこみと
らべて御神まつこそ御鏡
するよあきらいあんしよる
まぬへうれきつれてまいる

やまとの国学すなわち
めいとを作る原とす
また新古今ばかりにあつまる
ぬうちもすなわちその期
いたらざるを乃学をとなえて
そもそもの神の神なるを
すなわちもって紀和なるを
てはじめとなすなり
かくはなはだしくなるに
しつけてもって印の印神な

ちなわちもってこれ
てすなわちもって内外
乃ち学問をもって
ひとしくもってけ
おのおのこれ内外の
この外ちなわち学をさき
しかるのちこれ
ふたたびもって
れもって神を
それのうるおうるをみる

日
今業うかのわうすれ
業をとみとれうもの
ひろ紙好抽よつ新さ
よをかふ内侍乃これなの
場をみたもとそ乃そもの
をを地をへい車流ゥ紗乃
裏よ業をもちてみをよ
けるのうへよのうつ又
ばれ紙ゥ源氏の表の業を
おけくつこうそれもむ

うつれ表ゥ長ゥ号ゥ高よこ
せをりてつうゥんをとと
それをもむとれつを地
ひて業をうたきうすれ
タつうあのくつこけると
ゥうをと伊海よい几帳ゥ帷
ハ三帝うれ也表ハ綾裏
ハ繍文紗中信ありうたき
うをとれ裏乃うゥ也とをう
はれうり几帳の帷反は

表裏ともにうすき紙也但本
下乃帷より少しうすき紙
にてこれを包む事いかゝやうの
文言書よあるとうすき紙の
事とは仕直長軸
乃こゝろとゝ中よりやはり
らをいつゝむ乃初後とよし
心月一つてたれ朝よりか
ともなくもたれもたれく
一つ思いかの一ひとゝ云

まゝ源氏乃軸よりつゝ取
るにはかりつゝ結ぶ紙
はゝなるゝ仕ちゝ仕
ぬしや
弄
禅問山院本ハ一ハつゝみて
はきうつ只直長ハ軸よ
つゝはとゝるゝ結ぶ
つ一はゝ戸紙ゝ
きゝゝむよ　掲要也あゝ也
あゝゝを　むゝゝ仕也

おとろくしき
源氏めく兄弟也　此宮ハ源氏
まうむすめと
乃御むすめといふよりそれ
こそこれ程とよんとゞめ給
へつきぬこれ程とよりしん
とはおほさるしと也
かくもぐし　如此まて異
しうんとえや
とまうさん　源氏ハいと久

さかう程也
家は人乃おもはへる所と
乞高也人のおもへる
程しハむつかしめ程に
ほとゝと相当にれくかれ
と兄程にすゝしつに
おもの縁と心とさめ給し
程也
うきとめつらし
中
本にめつらし度ハうまれ也

ひとりなりとも　一同行也
なげくるえん　これをえん
むすびとりて也
うしなうよ　うちたつる也
けるあるとも　如来法氏
乃ゑて推量のごとく也
すくなきもきこえぬ
明珍もきこえぬ宗門也
うれしきもうれしきもれ
ぬ也いとむやうの習ひ

言をたのしうふるまい
よりけうとうとりとより
ふる也
おもしゃもはむも　久しく
思案するもいとうとうの
はなはだしき也
とうとうと
疾也疾
とうとうと也
聖はもてまたものと
仏事出家のうへは

かり金をして只管ねらへ
ども世界よりは其
はかりなくなりもし
いまそして只ひとつ物足
らぬいかりは源切
乃ちたいそうと管
なりをもつてそるる
けるいたるは物つるもれ
中に各々あの人のけはよ
ハなとうち出そのれるそれ

濃き思ふとはいふ人自然
よこもれるなりもそる
くきこそすれとある絹
もてそれをこあるよりあ
そすて覚えたるなり
いとはるる　おとときさ内
ひらみれてて
すそれ　事あり不
なりとそくこうれる
新のそくも
十月廿四日

郭公はまれなきと
四五月交雲外語　二三更
後雨中吟
古今
五月雨に物思ひをれは郭公
夜ふかく鳴ていつちゆくらん
此段第子地也五月雨の比
節ゝにも物思ひはれぬ夜の
事なれは夜ふかくなきつる郭公なと
もいつちゆきて聲をそへぬ
つきされとあはれ此風景なと

待てはきてもとゝめもして
かほしるさるとも也
はかなもひなと　無名宮乃
けそひ源氏よりく此詞也
めとやうって　女あやのと
くとりもちおもひし也
はなをするれもしれ
秘
紀のけおふりすくいられ
のへにと也　きれはといきて
の實父なのぬ心あるへきを

我が門のうさ
ぶらう世中とうつけい
人のうさへうるうん
おもなり　実文なり
ちりぬるを　わかよたれそつねならむ
ていは源氏物語乃至
てもうけうるもうれ
人なぬあうさ　今むうら
乃あうさ源氏の実
のうて浮きていあうて

又公卿ひけれてれも人きて
もいとなけきれも
ひるはすをに　源氏の実
よはゆうきく知れ
すきとはあり　さうう
まもひるも
いとうるくうはい　うらに
くはおはさあもうう
くとは叢雲の四もに
あれていうるうう

ふれともの[illegible]
わむとうたてのの
中宮はけうれてをむ
うれてくるいえしを
ときもの
むうろ
ばえい
うちしおひぬつき
人のうしもあうへきす
きれしけやれ不よく
きをあ[illegible]

あうしく　海中のけやの
和よく用捨にありてみさを
うかきもきるれぬよりも
ありうはむまきの　あなう
ときこうてをとを
むれたの　馬場殿は
長れ町新発田乃うもむ
のうは西野きれをて場
よちうれ坂も
はなそはうり　むうれ

御きを方へ源氏をとり
給也
高はよりすし　よれなの
事は同物也
つくもなし　さりとも
りきをとりとも也
人のんやみり　男女乃人
なりてこそ　あれ人いる也
物うとも也
いけこころ　前ゝいはな

ゝをばさへ　はけをもちる
人ってよきこそ　物中也
ゝも也ゝと　乃物をて
ゝはってゝも　ものゝきこ
ゝをゝきこそ　きけうしる人
よりはってゝ　はけて生り殺り
とはゝり
つるもゝも　弄　つやい色乃
外よあるもの　也　ものゝ
きよりゝ乃弄　物ゝるゝも也

[illegible]
山[illegible]あるを菖蒲は
治定してみる但源氏の
衣裳ノ文月(アヤメ)とてるゝ物
[illegible]きん其はまつの朝は
つやもなくこゝろもとゝ
[illegible]源氏の衣
裳[illegible]事とゝ[illegible]る其朝
ノ糸とみて[illegible]つれのこゝ
[illegible]文月もとゝ[illegible]一

[illegible]
[illegible]
[illegible]菖蒲
[illegible]合をてみるべき
私あやまりあるかもれの衣
[illegible]五六月ゝ暑
[illegible]今日立[illegible]
[illegible]おもしろ
[illegible]
源氏の好
[illegible]

むかしれ也
さうまうちきやく　あやまれ
ねよしえいのあり
みな絶えて　弟子地也其
時節にあまりてハ思あるす
もねよりさえ給もなき地
けふかへやりて人も
ひく人もなきさうくれし心をと
よける人もなき紀男とけ
しるやあわれにしるしひろくる也

神ハけっても引人なしとも也あや
めぐれをとさまそへ人よまる也
あしりも　あわめみね乃
なきぬあしまにこれをとこれ
きまうすへそれをいうてそあり
なき紀也
はなのゆるり　源氏ぬつ
一帖也備て当場所人出給也
ゆんすも　前の返りすせ
歌也

中はあや

昌蒲とはき

根

宋朱金門歳節
本引こ咲く

緑緑

霊緑

緑緑

御就之　延喜十三年五月
五日丙午　絲所奉葉玉
如常　撤去年九月九日葉莫以
葉玉懸瑞巫口桂為例　不審
定長三年五月五日丙申書
司立菖蒲　絁所奉續
命續如常
五月五日糸不葉玉　代供之
吉年代　勇代事　撤
白帳乃東の柱ゝ結付也
武德殿　五日節会

騎射の事あり
内宮内有典葉宮人
あやうと献之　又内侍葉玉
代之子　以下に移ふ例なり
也　乃至　のうち　打　花
分て　腰　ゆひて　各弾弦
すべき也
風俗通曰　五月五日　以五彩絲
繫臂者　辟鬼及兵　二名

長命縷ニ名續命縷ニ
名辟兵繒ニ名五色縷ニ
名百索、北人端午以雜
絲結合歡索、纏手臂（提要録）
又名條達、織組雜物以相
贈遺、及日月星辰鳥獣
之状、文繍金鏤帖畫貢
獻于所尊、古詩云纏臂
雙條達、初学記　歐詩、五色
雙絲獻女功、多因荊楚

記遺風
おほしきわらる　ところ
範葉子沉淪しおとし名
おほく今は思ひやられ
まつけれとも人の称に麻とる
くる事なくもまれと姫君
おほえてしとも源氏なと
かし家通あらハむつかれ
きこゆ人のちへとも
つねに源氏にハつれなくて

寒父は中ごろにかりて貴
思のおとゝ宮となりおは
てけるゆゑ源氏も廣義を
らみ事まの老をもて
ゐ給ひ たのおとゝのわか
方はとうとうてうもた
なくおさなくわかるゝ
き世をさびしくやうそ
をひ出給ひとゝうし
らあてゝ和もたゝまは

たゝかゝ紀とまとゝ紀ゝの
ゝをあるゝもあるをを
なてゝるゝなるをくをて
なてゝすゝけおとゝのゝ
むゝゝの女房ゝ公あゝをて
ゐきゝゝゝゝゝゝけゝや
ふをゝるゝおゝるけゝを
人ゝゝ見えゝけゝゆゝ
おゝゝるゝ陰ゝゝゝて
和ゝてゝあゝはゝゝゝを

なかりしなと今日はい
くまかとあるまなりけり
ひもすがら　紀ちる日也
中将乃けつのつきのてうひ
下
九月三日　左近騎射荒手結
九日　右近騎射荒手結　四日右近騎射
荒手結　六日右近騎射本手
結　私云　九日　荒手結
九日　本手結　九日の本手
結を日新と云歟

中
左近　本手結　四月　九日　本手
あり　今年　中将　左近
騎射　本手結　九日　荒手
いんする　中将
あやしくこそは
ようあれ　おとも　六条
院　あるまいとて
やうなる　也
むまもはれ　馬場殿
しなの　本手結　九日

はくらちなして青の
はあるを所として水の色
ゆるはくふをもてとあり
黄色人々
房ともの如
なのつき 殿上人おなじ
ゆき家俊ともの官人
おなじ也 左近官人とい
将監 将曹 府生とも也
すそこのきて 赤濃とい

儿丁乃帷上ハ白くすそい
紫或紺よ深ら也今は
世ゝも乗乃下すれも也
さゝぶゝそな
菖蒲それ 面青裏白也
中面青裏濃紅梅也
ふさあし 二藍
あゝもすそし 中 樗ハ面
房色裏青也赤濃ハすそ
紅色よ深ら也

あをしこれはすその色
す 薔薇木也　中　あをしこハ
西蕃芳裏青也一説西
紅梅裏青也これも紀す
くさとれる色也まず紫の色
いろそしての葉につとれ
るのこきあ也去つしはうすて
もえ紀と河床す　いつれ遠
ときや也
壽 同言りつ紀ぬつねのきぬとハ

差別如此　一禅客袈裟と
きる法衣するを唐衣といふ
今の世にも紫衣の門跡など
は着らく
こきは人のきぬ　濃と云ハ紫
乃こき色也　濃井紀のきぬなる
きぬ也
はなみこしそら　源氏乃初
ことく也
おほやけてよりハさ濃のきぬれて

[illegible]結ハ宮人[illegible]
馬よりて的ヲ射るおり
やけてるさ陣をもるとおり
屋をもるさけ人々もも
よりてかしおいるあるも
ゝけ世をくくすいりあ
いまるとはすいるとは
いるて又子結ハ宮人
ゝりゆるとけハ上篇の
すけるしいるとはすいるる

ゝもいるて[illegible]おゝ遠
ゝるるて
すけるハ沢将也
月ゝるけるて
中是ハ競馬の事をいる馬
場の手結ハ騎射ゝて
ゝて的をいるるゝ
ありて競るのるハ
九月五日の節会武徳殿ハ
行るるハ騎射の事ゝ

競馬もあり也六日又武徳
殿にて十列乃競馬あり
其後むかいちのもあり五
日ハ五位以上のみにて射
射る馬ものる六日ハ寮乃
馬ものりて競馬の事西
又長和三年五月十六日右大臣
乃上東門院乃中に行幸ま
て競馬ありしに賢あり則又
騎射の事もあり隨身衆

褐衣上着青地赤懸布
帯赤額先例用紫地錦
赤懸ハ度用競馬ハ赤
懸ハ又万寿元年九月
十九日開白の賀陽院にて
こまくらへあり行幸行啓
あり東射と馬場のおく
にて小人小南に御
馬ぞえにて競馬
騎射乃事あり

西宮社畧記

日今業騎射と競馬とは
近来の業束不同競馬は
い弁慶といふものを着を
陵もの業束のもの騎射
はして禍福を英を二
やうに業束をけりとね
ぶもえむるはくく
ひつくりてとハ競馬乃業
乃ものや

てるとい　あるをしき
そうの也
みるこ　ゆ　中むかをを
小より南へとをとれを
結ぶのむ　ゆを南の町
乃東の射　をを
人ともは　ん作るといふ也
弁慶楽らくをむを
弁慶楽　月ハ　ゆをりとあり
紀藤刊　或落路

方磬楽 太食調

うちまけはらんざつ

勝負 乱聲

諸の勝負は 乱声者

弓矢競弓 相撲或闘鶏とも

延喜十二年 二月子

陪亭合弓 勝方乱声あり

よしみつ 競馬行幸

子 蘇芳非尤 物龍右 蘇芳

左 又陵王 納蘇利者す

也方磬楽も定る其例ん

不動

よりともも 近衛会也

却 八幡

勅 也方にて 方にて

号 源氏の調也

とと 也

秘 ことこそ

知人 あれとこれ

知の人 ちもよ知や

うる人 あれと 行の

よくみれは紀あるのよき
いふれとむふんん
紅らしと以てちり紀こそ
これそ世るみ人のまるる
つ紀ん世るのちらしひらしと
以と粉こそよのきいまねしする
ねるれ此るはよくみきて
きすられうりといふん下に
ありて以る詞ちるへきん
粉可吟味也

御ときめきよはまそこそ
第ちる也此詞也源氏よりハ
本まてまし南もとも源氏
より六年よりれと也
そして後　此宮とりまて紀
此中よりて何るゝまも必お
まし申そらしや也
まの此きるまとり　第数也
婦乃如御内すこし此内よ
てこくするみ後ころのしと也

うちはみて　神說也　善惡
善惡也
おぼきこゝろ　孫也
ちゝ也
みゝ一里　ゝ
知る里　よくみ知る
こゝろ　返言也　知
知る也
ちゝあるこゝろとしも
なすとあるこゝろ　乃

人々也　知る里也　人を
みゝ知ると　指を　知る
里也　批判乃外の人々
善惡を　源氏の　ふまえ
人乃人々　つけ　雖然也
源氏乃本性を　人を
雖一　あ　くいるを　解
知る本性也　今也
源氏の仁心をみる　今也
人い人の　西をさゝ　求て

是非を論ぜず雖然付たり
すらんとは雲泥のるも
右大将ちなり式部
是より源氏の四位右大将
八嶺黒也也普々の名ゆる
現作出仕ちなもまつの
ちなるやうやと四
うう如也
ちう紀ちうそうん 嶺黒
をむにうそうむい不見なる

とんとお同也とそうそ
ハの和ちあも
おかちなもぬぐうそ
各別也新ちる也と源氏
ちあひ今はいちもの
ちもちなちより也
なちうくちなれうめ
ち乃字南統也一義ハ詞ノ
字也うくちも又ハ離うめ
しも 好家 野平統ん

いたのはつかやうにすると
ゐ中そとも
そそみきこえはて
思ふそ　つゐる乳散里な
はそうそうしんそむきなと
給事もなりそも
とそうそ　ことゐる地なと
も皆他不ふてあわは
今日ハ夜れ方の拍合ま
競ゐあわり乳長乃町

乃おほえとおほを乳散
里の仏地
そうすとゐもすさめ
中殺於遠
そとあれる人あるあや
あやく殺のすきたりる　嘉慶
今東菖蒲ハ駒の食あ
まそすはそすきめよいて
すきあいハ不食やみまそ
乃あわいこゐたよ水の
とりは菖蒲をうへゐは

ひとかの窓よみしつる紀
ちる里の秋乃寸におひら
つくしる絹つりよのつね
いすきめられぬ身なれとも
人の鏡ちらはけもちの
たはしある哉るらよし也
駒もすきとぬあやなと紀
ちる里の秋月のもへまりよ
咲しあへり
まかりにうけとちつる

可端午　能宣
まつこ海をけふよあひつるあやめ草
おひとくてやまよるるらん
わつこ海いちも紀にも也一万葉子
三鳴江乃む江のこ万とい
まとそと九音通する也駒し
そへてなん
中 駒らへ乃日なれとこ万と詞
ゆかれり
玉 比亭に包よあとりハ桜詞也
新をとつしつる為なれハよめり

まことにあやめと新たなる
ふる雨に引きもとゝさは
紅葉見ると源氏の中とも
まぜしてそれ和也
あつてちる紅　第三の紅也
紅散見は殺戮式部
源氏は主婦乃方の事なり
乃松ゝ引ゝれも流なる
ちるもの心也
あさゆふの心ゝて　源氏物

也胡夕ゝうちうひ松なる中
なれとも宮もむきこゝろ人さ
下ゝ通ゝ隔ゝなるこゝを
乃所也
松ゝ紅ゝゆゝ　堀代の家
紅ゝ源氏にゆゝて殺ゝ
ゝ　別ゝ部松也
ゝゝのあれゝの事ゝもゝ
ゝゝ人ゝ所あゝ通なゝん
ゝゝあ先　十月也

出ること　真法世まします
ひとりの親もしとしとむかえ
はせたまうぬ　給ふべく
事とはなりぬ　なりたする人
あるべきあるべき
親ありけり　むかえ給ふ
ひとりにて　ふるしとも
すみから乃根元　御吉祥
乃ると也
信吉初代より中納乃根元人

あるべきに一ハ家服をもとも
公もすれども　ふるうこと
とりもなんとて　ふるる
ひとり母親乃むすめ也
ゆ　はやまるひやまるひ
見て六角堂乃別当乃根
元は　乃ようなり　影
と親ひつけてあること師
をうつしひて眼元のすむ射よ
見出て切よりたちもて中納て

にみをるよあさ海と見て
高砂人の事とまりぬ
うれしき門出なれば家
右無事なるべきよあるべん
とすることまゝ母又ゝ人の
ことして七十ばかりなる老き
母めてられおそろしけるる
なめをもんとをもうべ
乃ことよ絵こして河内と
はるそれ見ば

ゝわきてもそのもと紙
よけてすこしうるかな
志のひそすこうこのゆな
俗言の姫君といふこそ
きるいふ和泉をみて
今業俗言の姫君の孫世
よりてきれたるはうあ
にそむゝ今乃おはゝ
和月さりはよ行るも
るゝ人のこゝのおそろ　さは

大文監のあるひけるよ
まれ行るも
玉
所あるうんとは言ふを
あるいやつは白海平絹根
見のさ角みてう今乃
世よ見ふるも
うんのうこか　なとうは
あるうくきも
高くるひのうこうこのもの
なるくるもうんる

女こそ物うるさき
玉
うるはうるをいうるうの
同
女乃物りあるをすきう公級
人よあさむうん　人よえ
かうる性とうるも
あうる年に　あまた物語の
中にすくるうるも
うるするよ　さもな
き事よりをうけて両温
乃頭家も知れるあるも

あれば
さきもれつゝ
郭公ちるまがけうちこの
うちもれぬこれ五月雨乃又
かるる世のかなしさと　みくら乃
事なるこゝに行るとなるさ
こゝにおもひさとも
つきうつけ　さもありけ
つくれつゝ　なるも
るんつくう　姫君のあるる

事なれもなきはは人
もかゝる心つくも　又ものも
またてもあるもれ
ものもあるかゝ事
さとおもひもとく
なりてこゝろかゝるも
ものもの又　二度
すもものもひとも
まものもみるに興あり
ものもるも

たとへ人、明石姫君
おとくふもの　弁口のさ
しるあるもあるいつく
さらとこいひ出すると
みさをはあるまじきと
むつまじ同行の
はなれさるべくもあらん
心乃実なる人、我をの
ひとりあらんと思ふ我
さてあれば実なるもと

のこと思ふ也源氏をすすめ
あるべき乃行幸也
あるべき人の同さうぼうる
事あるべく動弁惟
家をとゝ我なるかと
きるよりやうに思ひてこと
てこれをうこれをあ
く我心偽おほらぬ我
正後ちるはあるべき
志の人者に心をうつ

るつ記やうなれとさうはあ
らを書情若不拾書其辞
とをり和文ことあはは
人の作る日あるへうを
すり和しやりてをへを
まるう記るんとあり也
こにてうを清拾也
こをるを　書よりあと
しをと漢の又乃拾也
むうれか無の辞るれ

呼して　ひをとを拾也
拾よりを　此拾拾をと
こを拾代よりのをとを居
をけるなれを日本紀な
とはうをしをと也
あるこをてをくく
日本紀三十卷始于神代
至持統天皇御宇一品舎
人親王安麿等撰ら
今案拾代より世よあるを

抔しるしをけるは日本紀
乃る也これらこそとは總し
て物語草子別しては住吉
おか物語をとの物は吾国の事
なは上もなき日本紀抔
をしはかりてそれぞれ大概を
こそてしるしをときこれ識よ
なむなほしるしなとぞこれら
てとくにくはしき事は
ありそれとて源氏の君の

まこと物語は玉かつらの
君のかたてよみとりなして
の物語をおしく見給へとも
まことしく女君乃心まよはさ
ぬ物語の調也
かの人のうへとて
その人乃うへとて為とき
ありのまゝにてこそいはねとよ
き事はいふもとて也とし
事をとりあつめけしき

事紀とうあつめて一人
のよりてこそなれる紀も
あり紀もこそ世ふるよ
あるを紀いひ出てをく
とうあつめて一事として虚
事はなしとも云る紀あり
乃ちをいひなすやうは
初語の大意紀ばかりの人也
日本紀なりとはいふ事
なりといふ日本紀を何

ものあるやうにいなして
玉鬘紀事一ばかり也但
日本紀人皇紀に天武大略
ものの紀上下に神代上下に
日本紀乃ちと部ばかりあれ
ども而授受ばかりの神
秘おほくしてあすく女乃
人ちかよあるもれ
人情事変紀ばやのなる
事女紀四方ものもあるなる

[illegible]ありてある所に紀綱は日本
紀といふもけだしかのことを
る所あるべきなれども[illegible]
語に一つ女[illegible]
事也第[illegible]三史五経の
[illegible]しらうことあるべきな
[illegible]あるべきもあいきこ
なる[illegible]人[illegible]といへ
[illegible]世[illegible]ある事[illegible]
[illegible]まけてむけな

[illegible]もあるべき
[illegible]ばかりをば
もかあるべき人[illegible]
にもとする[illegible]
[illegible]といふ[illegible]
納[illegible]清か
識[illegible]の学[illegible]
あるべくもあらぬ也[illegible]
[illegible]
[illegible]古語[illegible]

つゝこはく記事のこ
やうをきゝてゝ見て
主上を逆をんるを
いかしめすきとれ給
事変御らんも口お
ゝをゝて一人ゝるけわ
法皇あるて女乃上の事変
ゝ御ゝるをさゝ
をゝゝる也一郎の類意
みる女をいまもゝるあり

女乃上事一ゝ御ゝ嫁姫よ
ありゝゝゝよりて御物語
主はゝるをゝゝけ若
ゝて女ゝゝの場面を
ゝるゝと本ゝゝ御道ハ
源氏ゝ仁原ゝゝ特達儒士
ゝ贈黒ゝ者も位を与
ゝゝる道もゝゝ色に
ゝゝ上天ゝゝ下左ゝ
後式ゝ基ゝいゝゝく

一揆をのこいはのもりて
ぬさをたむけてさるつくりてこれを
しるべ
人はことのはをつくりやうを
ならはせるなりやまとことのはを
とりてさむらいまなびをしる
人のうたをのさえつくりや
うたをおもひやまとのもの
事とハ日本紀と俗の物語
ものをいふやハ日本紀

神代よりわたりて漢字を
用ひられ人のことの
ハ
ものといふものあり
つくりは俗の物語ハ彼方やち
世のものをかりてかなを作りて
しやまとの国のものといふ
うなりて漢字と彼方と
昔と今との事をかきて
よりてなれとも古事
ハ和国の事なれ

給ふ如来とも
ゆ[illegible]
乃[illegible]
はるゝ[illegible]
小濁[illegible]
作[illegible]
竟[illegible]
なけの[illegible]
[illegible]
よは法華を表[illegible]

もろ〳〵付て余経乃諸教
説皆方便といふ方等
経ハ五時教乃中第三時ゆ
あるる大乗教の初門なり
浄名思益乃法也小乗
を弾ずして大乗と釈義
するゆゑに方等部とも弾
呵褒貶教とも二乗ゆ対
して説ずる也おなじく
仏ハ方便いつれも衆生の

樣をうみて統御する故
よりて法身あるとも
又あるいはもなしとの名
こゝふることゝなる
又そらをうるをもて識と後定
をもつて不淫衆生の五陰
ひとつの空有は二物をも
なれて別なる一實通ずる物
せずしてひとつにあるをおさむ
是三界唯一心と外に別法

の道理也煩悩と菩提と
ちがへい水と氷とのごと
氷と氷わかれは只一性也まことの
い菩提の水こゝりとなるさ
とをもて煩悩の氷水となる
ことゝ全く奇別のわか
あれ菩薩不二邪正一如の
理をもて生死涅槃ふたつなる
しるべきなり
いつれ何もむなしく

とはうらをもはかるべき
なのもはにはうりをはなち
ときをは則方便の諸教と
はるかにうらをもてとも
佛乃四法をもてひらけてとも
はとをのべたまへる也
諸物をくのはあれとも能
をもてよくきこえしり
佛のときおほふはもこれ
こころをふやうにもたるなれ

えのもろもろあるやうなれ
ともも方便とはひらけぬ
まて菩提と煩悩との二也
といふなり
もくいはもすべて仰るも
同
善悪不二乃理をあらはす
乃初後中もはもはもの
理をもつてはと物語をよき
さはりを行をつけてのおひ
なるもの

かるなりとは
ゆるされぬ程を
可こころとうやう
實に加様なれば又まろ様
まれ丸いむ〳〵男女の通
物也
寒法也
きれもの　癡ノ字也
けとものひいき
人けとゝ姫君也

やうに　むかしのやう
にはなるこゝ世よあるとも
ちもとも　むかしより詞也
やうとつくれども世ろう
よこれはこんとも
やうなるや　むかし濃
なるやうにとも
のはてゝ源氏い又むろう
はてゝなるものはてゝむ
ろう八親をうしとの様

我も又世の法をさとる
ゆえに事と只子とのおもて
源氏と世のつとめとそむき
と云詞にそなはる
おもしあり世
源氏乃事也むすこ子
をもて乃おもつる也
ふかくなるに　不孝也
心地観経第二去世間之恩
有其四種一父母恩二衆生

恩三国王恩四三寶恩
如是四恩一切衆生平等
荷負善男子父母恩者
父有慈恩母有悲恩世
間所高莫過山岳慈父悲母之
恩逾於須弥世間之重大
地為先悲母之恩亦過於
彼
よもとよりなる　不孝
乃ちい人百に切論のる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和泉清少納言枕草子は
出でたりし酒のおもしろ
さもあり又こ酒
をくゐと立音通するより
ていり
世界のるよつもなく
この物語とあるまつ
きつこそすれ
源氏乃自称也源氏と大様
よかすんてのわるる人酒ぬ

すもとも養乃巻まて
上新枕草子るん
けよしもひおるぬ
此朝臣しあれとも忘れ
乃草子を好あつ者よ
既了ん
みそ心　源氏の詞也
伊勢和泉よみそるる所
なりとこ山の隠密の事を
いりみそるるもんよう

あるものを
をしとおもふこゝろあれ
さけとうの心のうちとはかも
そねとも如何乃世まあ
るとさをもさるまとをなる
をへ
こゝろのたゝめて
おの綱もとゝ我ひ
きこゝとうもてそ
はるゝ世をさて

あるひんとあり
業氏とく明るよ世まれ
ゝるわるゝ我ゝいまし
めおへいこれをもろ
給ゝ四ゝとゝ行ゝんとも
人　是ゝ人おるゝ
ゝる世ゝ和行ゝと人まれと
宮ゝの前ゝ
ゝつゝ乃和行ゝ前東君と
て一世の源氏ゝて右大将

ほさうとゝいふ者あり此方
に二人ともに人ゝ見る一人
八歳者乃むすめ一人八時
乃門のれいもとゝ称する
の女一乃みそめ紙にて
九よあてうおあてこゝゝ
こゝ心すくれおてうをも
春雨ともめてまつの
て清のいうそくきて法之
一巻をつくるつゆよ尼人

くるいんうてまこゝ絵
拾ぬれを思かねと思人
八出家して山ゝこもりて
をこなうこゝ法華経
すみは乃ゝ紙ゆともそ
ゝ紙にかゝてやうてゝ
太宰前帥道雅のまとそ
あくおそうき
知る人はいきとゝ紙
なてうれ人ゝ紙つて

[illegible]
門[illegible]
[illegible]
子[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
外[illegible]
[illegible]
宮[illegible]

無[illegible]
父[illegible]
[illegible]
[illegible]
女房[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
崔子玉座右銘　安徳告過

[illegible]　了　腰黒

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
なるしるしなり
みすのこしのうへ　寝殿の南面
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　書籍所
[illegible]　執柄家にも
[illegible]
殿上人のみる所也

あまたもたてそへ
源氏の物語は夕霧と明石
姫君と中に二人ぞ[illegible]
大そう　夕霧の
うつくしやすく　源氏のおぼ
[illegible]
おぼしゆるす也
[illegible]
夕霧は[illegible]
[illegible]

ひるの内のこの　炬燵のひ
のるに宮つとを夕暮の
ちくしに移つる也
はもありぬつれ　をよりタ
暮れるに成いろ　さもあり
ぬつれいに公ぶとを出つき
あちこちるれるさるとさう
事とのこそもあれども
はるるな　おくるとさう宮
家うちきれて平ぶのうち

あれともうれとも寒く
ハさるはりてさるとさう事に
志れ　移る也
るぶつのきこそうの稲
六位すこをとをとをする也
やむをるれるるる
野屋井の花をなるあれ
つる也
寄つるこそて　倒也
おれる心也　夕暮方より

[illegible]

日本[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃ち式をかあさんり
うた

むすめ　芳原氏と母上と
のあそびにゆくとも
おほく人のうまれよ　さうよ
おなじあれともそれの
人のうまれてこひて立身
あるも

女はあるとも　女御と更衣
殿と云人のも

おほくてをけとこうり
弘徽殿女御理運立后
とあるもそれとも桐壺
よこそうしのみも
ひかる　更衣存也
うれしてこ　ものみも
第まのるも
をけそのける
そそのれゆてまり
けれ行第てそそよも

[illegible]

[illegible]

[illegible]